遠い希望

桜舞姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遠い希望

【Ｎコード】
Ｎ３６３９Ｙ

【作者名】
桜舞姫

【あらすじ】
初めての事件は、双子の誘拐。その事件をきっかけに、私はさまざまな事件を目の当たりにしていく。そして、不良の同級生は、実は名探偵だった…。

オープニング（前書き）

３作目ー！
そして、初めてのミステリー！
変なところや理屈に合わないところがあっても、皆様のスルースキルで回避してください！

オープニング

「聞いて聞いて！誘拐された双子の後輩が、空き地で気絶してるのを発見されたんだって！」

登校していきなり、大親友であるカナが私に飛びついてきた。
どうりで、廊下にいる人たちもザワザワしてたのか…。

さて、急に始まったこの物語ですが、まずは私の紹介を。
サヤカって言います。中学二年生です。
親友のカナと違って、冷静でクールだと、自分でも自覚してる。

親友のカナは、私を正反対。
突っ走りまくって、明るい子。悪い子じゃないんだけど、ちょっと空回りしすぎている。

そして、”誘拐された双子の後輩”っていうのは…。
２週間前、私達の学校の後輩である、双子の女の子が誘拐されたという事件が起こった。
テレビでも取り上げられ、犯人は２０００万円を要求してきたらしい。
双子の女の子は、長女がミウ。次女がミナ。
二人共、双子というところ以外はごく普通の女の子だ。
ミウは私と同じ委員会。ミナはカナと同じ部活。
だから、二年生の中では私とカナが結構衝撃だったと思う。

「へぇ、ミウもミナも無事？」
「えーと、結構衰弱してるけど、特に怪我もしてないらしいよ。犯人は、２０００万円を見事手に入れたんだって！普通はありえないよねぇ！」
「まぁ、誘拐って時点でありえないけど…」

私とカナが話してると、隣を誰かが通った。
目を追うと、それはこの学園で一番不良の女子生徒、キリカさんだ。
制服じゃなくてジャージを着用してて、ウォークマンを堂々と授業中にも使用している。
もちろん、先生たちの最大の敵。
でも、後輩や女子生徒からの受けはいいらしい。
まぁ、かっこいいしね。
今日は、どうやらサボる様でめんどくさそうに教室を出て行ってしまった。

「キリカさんって、かっこいいよね！」
「カナもそんな事いう…」
「だってだって！私もキリカさんのファンだもん！」
「はいはい…」

きゃあきゃあ言い始めたカナをよそに、私は授業の準備をはじめた。
でも、ミウとミナが戻ってきてよかったよ…。

この時は、私もカナも、まさか事件の真相を知ることになるとは思ってなかった。
全ては、キリカさんと関わってしまったことから始まる…。

＊　＊　＊　＊　＊

昼休み、弁当を持って中庭に向かったけど、困った事に人がいっぱいで座れそうにない。

「何でこんなにいっぱいいるんだろ？」
「フフフ…。この名探偵カナ様に任せなさいっ」
「あんたの場合は、”迷”探偵じゃない？」
「だまらっしゃい！あれを見て！」

カナの指さす先には、ミウとミナがいる。
どうやら、誘拐について興味津々の生徒たちに囲まれてるみたいだ。

「このカナ様にかかれば、これくらいの謎！」
「うん、確かに見れば誰でも解ける謎だね。じゃあ屋上行くか」
「ちょ、他に感想はないのかぁ！」

一人で勝手に盛り上がってるカナを無視し、屋上に向かう。
今日は天気が悪いわけでもないし、中庭が人でいっぱいなんだから仕方ない。
それにしても、何で屋上って人気ないんだろう？

「ねぇ、何で屋上って、人気ないんだと思う？」

後ろからついてくるカナに質問してみる。
まぁ、期待はしてないけど。
「何言ってんの、サヤカ。名探偵でもない私がそんなこと分かるわけないじゃん」
「あんた、一分前までなんて言ってたっけ」
そんなくだらない事を話してる間に、屋上についてしまった。
重たそうな扉を開けると、涼しい風が頬を撫でる。
こんないい所なのに、何で誰もいないんだろ。
「サヤカ。お腹空いたよ」
「じゃ、食べようか」
適当に隅に行ってカナと並んで座る。
誘拐事件なんて、あまりにもあっさり終わってしまってるし、私達が誘拐されたわけじゃないから、どこかニュースで見たような感覚なんだよなぁ。
屋上から下を見下ろすと、パトカーが丁度通りかかった。
「なんか、最近パトカーをよく見る気がする」
「私もー。誘拐事件があったばっかだしね」
「誘拐事件？何だそれ」
「「うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」
突然声をかけられ、私とカナの絶叫が見事にハモった。
バクバクいう心臓をおさえながら見上げると、そこにはキリカさんが立っている。
あ…。今気づいたけど、キリカさん、すっごく美少女…。

「誘拐事件なんてあったのか？」

美少女な顔とは裏腹の、男らしい口調に戸惑う。
無神経で単純なカナが、私と話すときみたいにキリカさんに説明し始めた。

「キリカさん、知らないのー？この学校で、双子の一年女子生徒が誘拐されたんだよ」
「へぇ…。犯人は捕まったのか？」
「ううん。犯人は行方不明。その誘拐された双子のミウとミナは、空き地で気絶してたのが見つかったんだって」

カナがキリカさんに説明してる間、私は疑問に思っていた。
何で、キリカさんはあんなに大騒ぎになったのに知らないの…？
それはカナも思ってたのか、質問する。

「ああ、私、あまり周りに興味ないから」

あっさりと言ったあと、顎に手を当てて何か考え込む。
そのポーズが、名探偵っぽくてかっこいい。
それにしても、いつもやる気がなさそうなキリカさんがこんなに興味津々に誘拐事件の事を聞くなんて…。
そんな事を考えてると、キリカさんが顔をあげた。

「…犯人は捕まらないかもしれないな……」
「え、どういう事！？」

思わず、キリカさんの呟きに反応してしまった。
いつも冷静な私が、情けない…。

「考えてみればすぐ分かる。まず、双子は一応無事に帰ってきたんだろ？もし、誘拐犯の顔を見てたら殺されてるさ」
「あ、確かに…」
「それに、誘拐は成功するよりも失敗する方が多いんだ。なのに２０００万円をまんまと奪ったということは、かなり頭の切れる持ち主という事だ。警察みたいにちんたら聞き込みしてても、解決するわけないだろ」

ほー…。すごいな、キリカさん…。
確かに、そんな風に考えれば犯人は捕まらない気がする。
カナが面白くなさそうな目で、キリカさんを見ている。
そりゃそうか。自称といえど、カナは名探偵に憧れてるから、目の前で説得力のある謎解き（？）をされれば面白くないだろう。

「……その双子って、お前たちの知り合いか？」
「う、うん。ミウは私と同じ委員会で、ミナはカナと同じ部活なの」
「じゃあ、今日の放課後に屋上へ来るよう言っておいてくれ」

キリカさんはそれだけ言うと、屋上の扉を開けて校舎の中に入ってしまった。

＊その２（前書き）

オープニング、その２です。

＊その2

放課後、人の目を盗んでミウとミナを屋上に連れてくることに何とか成功した。
二人共、誘拐事件の後のためか元気がない。
キリカさんは、堂々と屋上の真ん中で仰向けに昼寝をしている。

「キリカさん、連れてきたよ〜」

カナの言葉に、キリカさんはめんどくさそうに起き上がった。
それから、ミウとミナを見て少しだけ眉をひそめる。

「…そっくりだな」
「あ、でしょ？ミウとミナは、顔もスタイルも声も趣味も成績も、ほとんどそっくりなんだよ！」

カナの説明に私とミウとミナは頷く。
ミウとミナは、本当に見分けがつかないくらいよく似ている。
どちらかが鏡なんじゃないか、ってぐらい似ている。
だから、二人の両親も時々間違えるそうだ。
違う点と言えば、ミナが人見知りってことだけ。

「で、二人は犯人の顔を見てないんだな？」

キリカさんの質問に、ミウとミナは戸惑いながらも頷く。
当時の事を思い出したのか、二人の顔は青ざめている。

「声は聞いたのか？」

キリカさんの次の質問に、姉のミウが答える。
「なんていうか…。すっごく甲高い変な声でした」
「…ヘリウムガスを使ったな」
キリカさんの言葉に、カナが私に「ヘリウムガスって何？」と耳打ちしてくる。（あんたそれでも中学生か）
聞こえてたのか、キリカさんが律儀に説明する。
「無臭、無毒、無色で、空気より軽い希ガスだ。広告のバルーンや、子供が喜ぶような風船に使用されている。他にも、深海潜水用の呼吸ガスとしても使用されている。欠点といえば、使いすぎると体温調節が難しくなることだな。それと、空気に比べてはるかに高い。ヘリウムガスを吸い込むと、甲高い声を発声することができるんだ」
ふわー。キリカさんって物知り…。
ヘリウムガスって、そんな特徴があったのか…。
「と、すると声で犯人を特定するのは不可能だな。犯人にはなんていわれたんだ？」
「えっと、『騒いだり逃げようとしたりしたら、妹を殺す』って…」
「ミナと似たような事を言われました」
それを聞いたキリカさんは、何か考え込む。
しばらくすると、キリカさんはミウとミナを見た。
「誘拐事件の後で帰り道も怖いんだろ？送ってやるよ」
ミウとミナが、心底ホッとした顔になった。
…キリカさんって、同級生の男子よりも男らしいな。

ミウとミナの家は、意外と学校に近かった。
帰ろうかと思ったけど、二人に「お礼がしたいから、せめてお茶でも飲んでってください」と言われたので中に入る。
高級そうな家具と絨毯がしかれた廊下が、最初に目に入った。
…すごい、お金持ちの家だ……。

「ミウ、ミナ！大丈夫だったか！」
「「おじさん！」」

双子らしく、ミウとミナの声がハモる。
リビングらしき部屋から出てきたのは、優しそうな男の人だ。
さっきの反応からして、ミウとミナのおじさんだろうな。（名探偵じゃなくても、これくらいの推理はできる）

「あ、紹介します。お父さんの弟のおじさんです」
「「「初めまして」」」

ミウに紹介され、私達三人は頭を下げた。
おじさんも、少し遅れて頭を下げる。

「これでも、元・警察官でしてな。しかし、姪の二人も守れなくて、犯人も捕まらないとあっちゃ、威厳もかけらもありませんが…」

礼儀正しく、たくさん話すおじさんだ。
話の内容からして、ここの近くにある一番大きな警察署に務めてたみたい。

「すみませんが、長居はできませんので…」
キリカさんが、ミナの入れてくれた紅茶を飲み終わると、立ち上がった。
私とカナも急いで立ち上がる。
「そうですか…。2人を送ってくださり、ありがとうございました」
おじさんが、少しさみしそうな顔をしながらも私達に頭を下げる。
私は、ふと疑問に思った事を聞いてみた。
「そういえば、ミウとミナのご両親は？」
「警察署で、犯人に目星がないかを聞かれてると思います」
ミナがすぐに説明してくれる。
さて、帰るか、という時に、私は見てしまった。
キリカさんが、ミウとミナのおじさんを険しい目で見ていることを…。

＊　＊　＊　＊　＊

帰り道、キリカさんはブツブツ独り言を言いながら私達の前を歩いている。
うーん…。さっき、ミウとミナのおじさんを険しい目で見てたのが気になる…。
そんな事を考えてると、キリカさんはいきなり振り返った。
「二人共、もうこれ以上関わらない方がいい」

……え？
私とカナは、きょとんとした顔をしているだろう。
カナが私より先に口を開いた。

「な、なんで？」
「誘拐犯を相手にしてるんだ。中学生が太刀打ちできるわけないだろう。それに、もし犯人を見つけたとしてもただじゃ済まない。事件なんて、面白がって首を突っ込めば痛い目にあうことくらい分かるだろ？」

それだけ言うと、さっさと早足で歩いて行ってしまった。
私とカナは、黙ってキリカさんの後姿を見送った。

「私、やっぱり後輩のミナがひどい目にあったのに黙ってられないよ！」

いきなり、カナが真剣な声で言う。

「…うん、私も。ミウの仇くらいとってあげたい」
「じゃあ、明日キリカさんに直接申し込もう！」
「…何を？」
「手伝うんだよ！ホームズにワトソン！明智探偵に小林少年！名探偵には相棒がつきもの！」
「……はいはい、あんたが探偵ファンというのはよーく分かった」
「とりあえず、伝えたからね！明日、また屋上に行ってキリカさんにたのも！」

カナはそれだけ言うと、全力で走って行った。
取り残された私は、ため息をついた。

次の日の放課後、私達はキリカさんが帰ってないのを確認して屋上に向かった。
なのに、屋上には誰もいない。

「あれー？帰ってないよね？」
「うん…。どこ行ったんだろ…」

頑張って頭を回転させる。
……あ、そうだ。

「ミウとミナのクラスに行ってみよう」
「え？何で？」
「うん…。自信はないけど、キリカさんが二人の所に言ってる気がするんだ」

昨日、ミナとミウのおじさんを険しい目で見てたキリカさん。
もしかしたら、キリカさんはおじさんを怪しいと思ってるのかも。
まぁ、証拠も根拠もないからほとんど当てずっぽうだけど…。

「うーん…」

カナも、腕を組む。
その時、屋上の扉が開いた。
そこにいたのは、キリカさんとミウとミナ。

「…お前ら…」
「キリカさん！私もサヤカも、納得してないよ！ここまで首ツッコ

んだんだから、最後まで一緒にいさせてもらうからね！」
カナがキリカさんにズイッと近づいて叫ぶ。
キリカさんは眉間にしわを寄せて、ため息をついた。
「…しょーがねーな。危なくなったら自分で逃げろよ」
「もちのろん！」
「ミウとミナに聞いて、面白いことが分かったんだ」
「面白い事？」
キリカさんがニヤッと笑う。
八重歯があって、何かすっごくカッコいい…。
「事件に関係してるかもしれないことだ。あのおっさん、１０００千万の借金をしてるんだとよ」
「「えええええ！？」」
１０００千万…。
うーん、お小遣いが１０００円の私には脳がついていかない。
「おじさん、実は警察署で問題を起こして首になったんです。その時、莫大なお金が必要になったらしくて…」
「もともと、パチンコや競馬によく行く人なんだとさ。それから、警察でありながらヤクザや不良と手を組んで暴力団ともめ事を起こしたりな」
…あの優しそうな顔からは想像もつかない。
人って見かけによらないんだ…。
「でもおかしいよ。だって、誘拐犯は身代金を２０００千万。１０

００千万の借金にしては多すぎない？」
カナの言葉に、ミウとミナも頷く。
多分、おじさんだから犯人だと信じたくないんだろうな。
「問題はそこなんだよなぁ。しかも、「おっさんが犯人だ！」っていう決定的な証言も証拠もないし…」
キリカさんは腕を組んで唸る。
ミナが口を開いた。
「おじさんは私達の見分けがつくほどかわいがってくれたんです！私達を誘拐するわけがありません！」
「ミウ…」
必死におじさんの味方をするミナを見て、もしおじさんが犯人だったらと思うと可哀そうになる。
その時、キリカさんが目を見開いた。
「…待て、おっさんはお前たちの見分けがつくほどかわいがってくれたんだって？」
「は、はい…」
それで確信を得たキリカさんの表情を見て、ゾクッとした。
まるで、獲物を見つけた狼の表情…。
「分かったぞ！この勝負、勝った！」
キリカさんが再び八重歯を見せて笑う。
目の前の『名探偵』の目には、私達には分からない世界が広がって

いるんだろうな…。

＊その３（前書き）

オープニング、その３です。

＊その3

そして、昨日のようにミウとミナの家へ。
キリカさんは「分かった！」って言ってたけど、私達には全く分かんない。
しかも、犯人はやっぱりおじさんだって言うから、ミウとミナの表情が暗い。
家の中に入ると、またおじさんが出迎えてくれた。

「おお、今日も二人の介護か？本当にありがたいねぇ」
「おっさん。これから誘拐犯を捕まえようと思うんだ」

キリカさんの言葉に、おじさんの目が一瞬泳いだ。
でも、すぐに大笑いする。

「君、探偵ごっこのつもりかい？そういうのは警察に任せとくものだよ」
「任せられないから、私が調べてるんじゃないか」

キリカさんの挑戦的な口調に、おじさんの表情から笑顔が消える。

「…話して御覧なさい」
「簡単だ。まず犯人はどうやって身代金を手に入れたか…。普通、身代金を渡すときに警察は誘拐犯を捕まえる。なのに、今回の誘拐犯は捕まらなかった…。私もそうだったが、大抵の人間は「頭のいい誘拐犯」と思うだろう。でもよく考えてみろ。警察に捕まらず身代金を簡単に手に入れる方法なんて、たった一人でできっこない」

キリカさんの言葉を、頭の中で解析する。

……あ！

「もしかして、警察に共犯者がいるってこと！？」

「そうだ。知らないかもしれないが、あの大きな警察署には元・ヤクザや不良もいるんだよ。おっさんと手を組んでたやつらもな！身代金の残りの１０００千万でもエサにすりゃ、口封じにもなるだろ」

そういえば、ミウとミナのおじさんはヤクザや不良と手を組んで暴力団とトラブルを起こした…。

どんどんピースが埋まっていく。

「そして、犯人が分かる大きな行動が、一つだけあるんだ」

キリカさんがおじさんを見てニヤッと笑う。

誘拐犯の行動で、犯人が分かる…？

「誘拐犯は、ヘリウムガスを使ってミウにこういった。『逃げたり叫んだりすれば、妹を殺す』

そして、ミナにはこういった。『逃げたり叫んだりすれば、姉を殺す』

…明らかにおかしい事が一つだけあるんだ」

えっと…そうかな？

必死に考えるけど、全く分からない。

「ミウとミナはそっくりな双子だ。声も、成績も、背格好も、顔も、性格も…。まるで鏡に映したように。

なのに、どうして誘拐犯は、そっくりな双子である姉と妹の区別がついたんだ？」

……！
そうだ！誘拐犯は、そっくりなミウとミナの区別がついていた！
ってことは…。
「そういう風に考えると、親でも難しいミウとミナを簡単に見分けられるおっさんしか犯人にはならないんだ！」
キリカさんがビシッと容赦なく言う。
おじさんは、その場に崩れ落ちた。
「おじさん…」
「…どうして…？」
ミウとミナの目から、大粒の涙があふれている。
おじさんは頭を抱えた。
「仕方なかったんだ！借金取りに追われ、もうこうすることでお金を手に入れることしか…！」
「……カナ、悪いが警察を呼んでくれ」
「う、うん…」
カナは部屋の奥に入って行った。
その足取りが、少し重い。
キリカさんがおじさんの前に立つ。
「おい。この二人を無事に逃がせば、誰かにバレルかもしれない可能性も高くなるだろう。普通、顔を見られてなかろうが誘拐犯は誘拐した子供を殺すもんだ。何故、ミウとミナを殺さなかった」
「…殺せるわけないだろう。小さいときから、俺を慕ってくれた、可愛い姪を殺せるはずがない…」

おじさんの言葉に、ミナがワッと泣き出した。
ミウもミナを支えながら泣いている。

それからしばらくして、パトカーのサイレンが響いた。
おじさんは涙を流しながら、パトカーに乗り込む。
ミウとミナは、キリカさんの後ろでおじさんの可哀そうな姿を見ないように、ずっと泣き続けた。

今回の事件は、おじさんの姪に対する愛情が命取りになって、幕を閉じた――

＊　＊　＊　＊　＊

ミウとミナのおじさんが逮捕されてから一週間――
中学生が誘拐犯を捕まえた、というニュースは、あっという間に日本中に伝わった。
だからか、取材者や記者の人たちが学校に押し寄せるし、私とカナも当時一緒にいたからターゲットにされてるし。
しかも、キリカさんの噂はもちろん学校中にも伝わり、キリカさんは一躍有名人になった。
休み時間なんか、キリカさんのファンの子達が一斉に教室になだれ込んでくるもんだから、大変なんてもんじゃない。
しかも、キリカさんの事を快く思ってない子達もいるし…。
でも、本人は全く気にしてない。
前と変わらず、屋上で昼寝をしたりしている。

「キリカ！」
「……なんだ、サヤカとカナか…」

カナはキリカさんを呼び捨てにするようになった。
あと、キリカさんはファンの子達にほとほと疲れてるのか、いきなり話しかけると予想以上の反応を見せる。

「見て見て！キリカのファンの子達に、『キリカ姉様に渡してください！』ってラブレター預かったよ！」

「見る？」とカナが言う前に、キリカさんは手紙を奪い取って屋上から落とした。
…よっぽど嫌なんだねェ…。

「最近、「手紙」って単語だけでダメなんだよ…。家にもファンレターがいっぱい来るし…」
「…大変だね」

私は心底、同情の眼差しを向ける。
カナがＫＹな発言をする。

「ちなみに、今まで捨ててきた手紙を集めたらどうする！？」
「…これ以上手紙を見たら…吐く」

青ざめた顔でいうキリカさんからは、前のような狼の面影は一つもない。
そんなにいやなんだねぇ。
まぁ。私も目の前にたくさんの手紙があったら読む気失せるけど。
そんな時、屋上の扉が開いた。
そこにいたのは、ミウとミナ。それから私とミウの委員会の先輩。

「ミウ、ミナ。大丈夫か？」
「はい。ショックだったけど、おじさんがちゃんと罪を償うって言ってたので…」
「あと、ちゃんと私達はおじさんに愛されてるって事も分かってますから」

二人の言葉に、キリカさんは満足そうに笑う。
笑うと、どこかのお嬢様みたいに気品がある。
でも、その笑みはすぐに消えてしまった。

「ところで、後ろのそいつは？」
「私とサヤカ先輩と同じ委員会の、トモミ先輩です」

トモミ先輩はキリカさんに軽く会釈する。
トモミ先輩は、私とミウが入っている図書委員会の委員長だ。
お姉さんみたいに優しくて、一人っ子の私の憧れの存在。
でも、トモミ先輩はいつもみたいな元気がない。

「どうかしたのか？」
「…キリカさん。ちょっとお願いがあって……」

――こうして、私達はまた新しい事件に巻き込まれることになる――

＊その３（後書き）

オープニングはこれで終了です！
これで、三人のキャラ、あとキリカさんの名探偵ぶりが分かったかと思います！

不幸な恋人争奪戦（前書き）

第二部です。

不幸な恋人争奪戦

「恋人が二股してるから、自分と相手のどっちが本当は好きか調べてほしいぃ？」

明らかに、脱帽した感じのキリカさん。
確か、トモミ先輩が付き合ってるのは…。

「ケイ先輩ですよね？生徒会長の…」

ミウの言葉に、トモミ先輩は力なく頷く。
ああ、あの人か…。
生徒会長、サッカー部の部長でありエースストライカー、成績優秀という、完璧な人。
顔もさわやかタイプのイケメンで、学校で一番モテモテ。
でも、私はあの人が苦手。
何か、あまりにも完璧すぎて人間じゃないみたい。

「めんどくせぇな。何で中学生なのに恋人とかできるんだ？」

キリカさんが心底信じられない目でトモミ先輩を見る。
多分、キリカさんは恋愛とか全然興味ないんだろうな。（私もだけど）

「何言ってんのキリカ！女は生きてるからこそ恋をする！いや、恋をするために生きている！
女はねぇ、恋をしないと魂が死んじゃうの！枯れちゃうのよ！なのに、ケイ先輩ったら…信じられない！」

カナの熱弁に、キリカさんは珍しく唖然。
カナはああ見えて、私より乙女だ。

「キリカが調査しないなら、私がする！直接、ケイ先輩に聞いてこれば――」
「門前払いだろうな」

キリカさんの言葉に、カナがピシッと石のように固まる。
それでも、負けじと次の言葉を言う。

「なら、周りの人から情報を集めれば――」
「そいつ、完璧な人間なんだろ？そんな人間が、「自分は二股してます」とバレるような行動や言動をすると思うか？」

こうして、キリカさんの説得力ある言葉によりカナは完敗。
真っ白に燃え尽きて、屋上の隅に行ってしまったカナをひとます無視。

「まぁ、確かに人間関係の調査も探偵の仕事だが…」
「本当にお願いキリカさん！私、ケイに「別れよう」って言われたの！でも、私別れたくなくて、それでそのことを伝えたら、「俺が悪かった」って…。でも、それだけじゃ安心できない！本当はどっちが本命か知りたいの！」

トモミ先輩の剣幕に、私とキリカさんはちょっと引く。
しばらくの睨みあいで、キリカさんが諦めのため息をついた。

それから、学校でもあちこちで聞き込みしたけど、ケイ先輩が見事に隠してるのか誰も知らないらしい。
ミナの情報では、ケイ先輩と付き合っているもう一人の女子生徒の先輩は、アヤメ先輩。
ただし、ミナがどうやってその情報を掴んだかはキリカさんですら解けなかった。（だって、「どうして分かったの？」って聞いたら、ミナったら腹黒い笑みを見せるだけなんだもん）
あと、ミナはもう一つの情報を持ってきた。
今日、土曜日はケイ先輩はアヤメ先輩とデート。
そして、明日の日曜日はトモミ先輩とデート。
ただし、ミナがどうやって情報を掴んだかは恐ろしくて聞けなかった。

「アヤメ先輩とケイ先輩、何話してるんだろ…」

そして、今はカフェの中でケイ先輩とアヤメ先輩を尾行中。
ミウとミナは、塾があるとかで来れないらしい。
私はむしろ、ケイ先輩とアヤメ先輩の関係よりもカナの今の服装の方が気になる。
カナの服装は、黒いサングラスにマスクに黒いジャンパーに黒いズボン。
思いっきり怪しい人物だ。
何でそんな恰好なの？って聞いたら、「尾行と言えばこれでしょ！」って即答された。
カナのセンスは、キリカさんでも解明できないだろう。
私は薄い青のジーパンに裾の先に花びらが点々と模様付けされている七分袖という、シンプルな恰好。
この中で一番おしゃれといえば、キリカさんかな。
いつもは下ろしている背中まである長い髪を、後ろの高い位置でおだんごにしている。

おだんごにできなかった残りの髪を後ろに流して、すごくいい感じ。
恰好も、短い薄ピンクのスカートと黒い膝までのスパッツ。上は綺麗な空色のチュニック。
ちなみに、先輩たちの尾行中にもキリカさんは5回も同い年くらいの男の子に声をかけられ、
あげくの果てには、ある有名なアイドルプロデューサにも声をかけられていた。
同じ女の子として、かなり憧れます…。

＊　＊　＊　＊　＊

カフェを出たケイ先輩とアヤメ先輩を追いかける。
ちなみに、私もキリカさんもカナから離れた場所にいる。

「それにしても、あのケイ先輩ってデレカシーってものがないよね！」

カナが突然言い出した。
私的には、そんな怪しい恰好で道を堂々と歩けるカナの方がデレカシーがないと思う。
キリカさんがカナの方を振り返る。

「どこがないんだ？」
「だって、普通人混みだったら道の端っこに行って好きな人を人混みではぐれないようにするでしょ？ケイ先輩、堂々と真ん中で歩いてるもん。ほらアヤメ先輩もケイ先輩についていくのがやっとって感じ」

カナに言われて気づいた。
確かに、アヤメ先輩は人混みのせいでケイ先輩から少し後ろにいる。
「信じられないよね！あんなの、「はぐれたいです」って言ってるようなものだよ！」
カナって、恋愛系になると鋭いね。
キリカさんが顎に手を当てる。
「…もしかしたら、あの男、恋人が嫌いなんじゃないか？」
「「え？」」
私とカナの声がハモる。
確かに、トモミ先輩と「別れたい」って言い出したのも嫌いになったからかも？
でも、それだったら何で…。
「『何でキッパリ言って別れないんだろ？』って顔してるな？」
「う…。はい、図星デス」
「カナ、もし好きで好きでたまらない男に「嫌いだから別れよう」って言われたらどうする？」
突然質問され、カナはうーんと首を傾げる。
「えっと…。自分は好きなのに、相手に嫌いって言われたら、多分気が狂って友達に泣きながら打ち明ける気がするなぁ」
「やっぱりそうか。多分、あの男はそれを恐れてるんだよ」
……ああ、そうか…。
完璧主義のケイ先輩は、二人を振ったことで自分たちが付き合って

たっていうのをバレるのが嫌なんだ。
二股かけてるってバレる可能性があるし…。
「まぁ、それは明日に他の先輩とのデートを見れば分かる話だけどな」
キリカさんがそこでニヤッと笑う。
そこで思い出した。
私…。明日、親戚の家に行かなきゃ…。
二人にそれを言うと、カナが早速文句を言う。
「えー！？そんなの、行きたくないって言えばいいじゃん！」
カナ、私の親は、我が道を進むタチの悪い天然な人って知ってるよね？
キリカさんが唸る。
「残念だな…。サヤカの冷静な判断力があれば、他のことも分かったかもしれないんだが…」
えーと…。
それって、私はキリカさんに期待されてるってこと？
……何か、すっごく嬉しい！
「で、どうだった？」
月曜日、放課後に屋上に集まる。

トモミ先輩は来ない。
ミウとミナは、どうやら昨日は一緒だったらしい。

「トモミ先輩も似たような感じ。本当にケイ先輩ってやな奴！」

カナが拳を握って怒り出す。
ミウとミナもその横で同じように怒っている。

「まぁ、あの男は二人の恋人のことが嫌いというのは分かったな」

キリカさんが結論を出す。
そうか…。何か、二人の先輩が可哀そう。
くっそー！あの先輩、二度と生徒会選挙で当選してやらない！

「それにしても、何でトモミ先輩は来ないんでしょ…？」

ミウが不思議そうに首をひねる。
私も、さっきからそれが気になってた。

「えー？忘れてんじゃないのー？」

カナがあくび混じりに言う。（あんたじゃあるまいし…）
だけど、キリカさんも特に気にしてなさそうだ。
それよりも、何か別のことを考えてる感じ。
…キリカさん、何か隠してるのかな…。

次の日、私達は信じられないものを見た。

トモミ先輩の彼氏、ケイ先輩が二股していたもう一人の先輩が、自殺していた。
ここからじゃよく見えないけど、血は周りに広がっていて、死体は仰向けに倒れている。
教師はキリカさんに気付いて駆け寄る。
キリカさんは教師を押し退け、死体に近づいた。

「…違う。これは自殺なんかじゃねぇ。殺人事件だ」

キリカさんの言葉に、空気がザワッとする。
カナが疑問をぶつけた。

「どうして！」
「自殺だったら、落ちた時は普通うつ伏せなんだよ。でも、誰かに突き落されると死体は自然と仰向けになるんだ」

その言葉に、何人かの視線がトモミ先輩に集まった。
まるで、「犯人はトモミ先輩」というような目で…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3639y/

遠い希望

2011年11月17日18時10分発行